
ふたりの手

みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりの手

【Nコード】

N4380Z

【作者名】

みかん

【あらすじ】

好きになってはいけない人を好きになってしまいました。

どうしてこの人なんだろう？

どうしてこんなに会いたくなるんだろう？

どうして涙が止まらないんだろう…

悲しく切ないあなたへの想いを込めた物語。

ひとりぼっちのクリスマス

ねえ、今すぐ会いたいって言ったらあなたは来てくれる？

メールを打ったものの送信出来ずに削除してしまった。

空気は澄み、街のイルミネーションが最も綺麗に輝く12月24日。
街を行き交う人たちはみんな幸せそうな顔をしている。

大好きな恋人や大切な家族と一緒に過ごすクリスマス…

でも私は今年も一人ぼっちのクリスマス。

会いたい人には会えない…

それでも会いに来てくれる気がして気付けば
時計の針が12時をさしている。

「どうしてこんなにも好きになっちゃったんだろう…」

握り締めたケータイの画面にポタリと雫が落ちていた。

クリスマスプレゼント

気付くと時計は a m 6:00

ケータイを握り締めたままどうも寝てしまったみたい。

化粧も落とさず涙でボロボロのひどい顔・・・

「最悪・・・」

化粧を落として洗面台へと立ったときケータイが光っていることに気が付いた。

メール？

開いてみるとあの人からだ・・・

メリークリスマス。
俺からのプレゼント。
外出てみな？

相変わらずそっけないメール。

彼の言う通りベランダへ出てみると

外はキラキラと一面雪で真っ白に輝いていた。

「これがプレゼントね・・・くだらない・・・

そもそもこれはサンタさんから良い子へのプレゼントでしょーが。

ホント嫌になる・・・何で・・・」

何で・・・涙が止まらないんだろう。

こんなくだらないコトしか言ってくれない彼なのに

そんなメールさえ私にとっては嬉しくて宝物だ。

「はぁ・・・これからどうすんだ私。」

鼻をグズグズ言わせながら彼からのプレゼントを眺めた。

言えない気持ち

泣き過ぎて目がパンパンに腫れてしまった。

会社の休憩所でコーヒーを飲みながら鏡を見ると男の人が映った。

「桜どした？そのひどい顔。」

その声の方を振り返ると、武井直人が立っている。

「ちょっと飲みすぎて・・・」

「何でッ！！何で俺呼んでくれねーの??」

「どーせ来ないくせに。」

「・・・行くし。」

はいはい。出たよいつもの口だけ。

「てか、俺からのプレゼント見た？すごくね？？」

「あれはタケちゃんからじゃなくてサンタさんが良い子のみんなにあげたプレゼントです。」

「はぁ？俺からだし。俺の副業サンタクロースだし。」

「はいはい。サンタはパパのお仕事だもんね。そー言いたいんだね。」

つい、イラついた口調で言ってしまう。

事務所に戻ろうと彼の前を横切ろうとした時

彼が私の腕を掴み耳元でボソリと言った。

「会いに行けなくてごめんな。」

私は何も無かったかの様に彼に笑った。

「いつもの事じゃん！別に気にしてないから。」

私はその言葉だけを残してその場を後にした。

笑顔も言葉も全部ウソ。

ずっとあなたからの連絡を待ってた。

あなたのせいでこんな最悪な顔になっちゃった。

あなたが会いに来てくれないから・・・

でもそんな事は言えるわけないよ。

言っちゃいけないもん。

最初からこうなる事がわかってあなたを好きになったんだもん。

あの日あなたに手を差し伸べられた日から・・・

桜だけにさくら

5年前、

春の風が桜の花びらと香りを運んでくる心地いい季節に彼に出会った。

入社式を終えた私は心地よい風を感じながら

これからの期待と不安でいっぱいだった。

ふと視線を感じた方を見ると

ヒゲ面で小汚い作業着を着た男の人が私の方を見ていた。

彼と目が合った瞬間、なぜか彼から目が離せなくなった。

特別タイプでもないのし、男前でもない。

でも目が離せない。

彼が私の方へ歩いてくる。

目の前に止まり、私の髪の毛を触った。

「なっ・・・??!」

あまりの驚きに言葉にならなかった。

「桜だけにさくら。」

彼はそう言っているとニカッと笑い桜の花びらを私に見せた。

「・・・」

「今、笑うとこですけど？」

彼は私の顔を覗き込んだ。

「ははは・・・」

私は一生懸命引きつったつくり笑顔をした。

「桜って綺麗だね。あんたにぴったりじゃん。」

「えっ？」

「あんたの名前でしょ？石井 桜 23歳。」

「な、何で知ってるんですか？」

「はははッ！そんな目真ん丸くして驚かなくてもいいでしょ。」

俺、武井直人23歳。タメだけど俺のが一応先輩だから。

そこ忘れないでねッ！！」

私の肩をポンと叩いた。

「はぁ・・・」

「んぢゃそろそろ俺行くわ。石井さんまたね。」

「まっまた・・・」

そう言うとははいそいそと帰っていった。

何なんだあの人・・・

いきなりの絡みに戸惑いを感じていると後ろから声をかけられた。

「いきなり絡んでたねータケちゃん。」

振り返るとモデルさんみたいに綺麗なお姉さんが立っていた。

「あっ、いきなり声かけてごめんね。」

彼、石井さんが来るの凄く楽しみだったみたいだから。」

「私の事、知ってたんですか？」

「フフフ。それは彼に直接聞いてみてくれるかしら？」

「はい・・・」

「大丈夫よ。彼、悪い子ではないから。まあ・・・いい子とも言
ないけどねー」

「えっ・・・」

「冗談よ。冗談ッ!!これから石井さんの指導役として一緒に

お仕事させてもらう 村川 楓です。よろしくね。」

「よかったしくお願いしますッ!!」

私は慌ててペコリとお辞儀をした。

「ちなみに石井さんお酒は好き？」

「好きですッ!!」

「そう・・・なら良かったわ♪」

ニツコリ笑って言っているが目の奥が笑ってない感じがして
凄く怖かった。

「あははは・・・」

この会社でやっていけるのかどうか不安しか残らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4380z/>

ふたりの手

2011年12月18日15時54分発行